



プレスリリース

2012年10月29日

**海洋保護を求め高まる市民の声：
CCAMLR 会議最終週に探検家ロスの子孫、AOA の訴えを支援
AOA(南極海連盟)**

[2012年10月29日、ホバート]

AOA(Antarctic Ocean Alliance、南極海連盟)は29日、タスマニア州ホバートで行われている南極の海洋生物資源の保存に関する委員会(CCAMLR)年次会合で昼食会を催し、各国代表に対し、南極東岸およびロス海における海洋保護推進を求める一般市民の声は地球規模で高揚していると訴えた。これにはロス海を発見した英国の探検家ジェームズ・クラーク・ロスの子孫も賛同している。

今日から最終週に入った CCAMLR 会議では、南極海における海洋保護区設立案の検討が続いている。24 の国および EU から成る CCAMLR は、南極海の保護を求める地球市民の期待に応えられるか否か、重大な局面を迎えた。

「南極海の保護を求めるオンライン署名活動に、世界中の 120 万人もから署名が集まりました。その全員が今週、CCAMLR が導き出す結論に注目しています。」と AOA 代表スティーブ・キャンベル氏は述べた。「我々は会議に参加できない地球市民の代弁者として、各国代表に対し、意見の相違や既得権問題などは棚上げし、海洋保護の実現に向け歴史に残る第一歩を刻むよう求めます。」

29 日の AOA 昼食会にはゲストとして探検家サー・ジェームズ・クラーク・ロスの^{らいそん}来孫娘(5 代目の孫娘)であるフィリッパ・ロス氏が登場した。CCAMLR 諸国に対しフィリッパ氏はスピーチの中で、南極海という貴重な財産を未来に残すため強い指導力を発揮してほしいと、ロス家一族を代表して要請した。

「CCAMLR は南極海の生物の守護を担う組織として、未来永劫の遺産を築くチャンスに直面しています。」フィリッパ氏は呼びかけた。「自身の行動規範を見つめ直し、未来への投資を決断し、ロス海のみならず南極圏の保護のために海洋保護区指定を実行に移すことが、南極海を未来につなぐのです。」

南極海の資源を管理する国際組織である CCAMLR は、先週から 2 週間にわたる年次会合に入り、2 つの重要な海洋保護区指定案について審議を進めている。ひとつは、地球上で最も手つかずの自然を残すロス海の保護に関するもので、米国およびニュージーランドの 2 か

国がそれぞれ保護区案を提出している。もうひとつは南極大陸東沿岸海域に 190 万平方キロの保護区を設立する案で、オーストラリア・フランス・EU の 3 機関が共同で立案したものだ。

南極大陸東岸はペンギンやアザラシ、クジラなど、南極海の生物が多数暮らす隔絶された海域である。海底の地形や海洋学的特徴も他では見られない希少なもので、高い生物多様性を支えている。ロス海もまた、特有の、膨大な数の生物たちの生息地であり、中でも成長が遅く長生きな深海魚メロは、ニュージーランドや韓国、イギリス、ロシア、スペインなど、世界の国々から漁業の対象とされるようになっている。

AOA の研究では、南極海の実に 40%にあたる海域が海洋保護区・禁漁区ネットワークとして保護される必要があると判明している。これは現行の海洋保護区面積のほか、これまでに行ってきた保護策や保護計画の分析で特定されていた海域、また、新たに保護の必要性が明らかになった、極めて重要な生息地などを合わせた結果である。

南極の海洋生態系をおびやかすものは増え続けている。とくにシーフードに対する需要が世界中で高まっており、南極海の生物資源にも漁業の手が伸びている。さらに気候変動による影響が、クジラやアザラシ、そしてペンギンなど海鳥の生息地やエサの状態を悪化させつつあるのだ。